慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	玉梓以前
Sub Title	Before the entrance of lady Tamazusa
Author	内田, 保廣(Uchida, Yasuhiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1994
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.65, (1994. 3) ,p.84- 105
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	檜谷昭彦, 佐藤一郎両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00650001-0084

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

玉梓以前

内田保廣

一

川村次郎は一九八四年（昭和59年）一〇月に『南総里見八犬伝』についての評論、『里見八犬伝　古典を読む』を岩波書店の「古典を読む」シリーズの一巻として刊行した。そのはじめの部分は次のようになっている。

「『八犬伝』の物語は一人の女の呪いからはじまる。はじまるというばかりでなく、その呪いが最後に打ち破られた所で、物語は実質的に終るのだと見ることさえ可能である。しかもこの呪いは、決して理不尽でも超自然的でもなく、至極正当な根拠を持っている。」

この『里見八犬伝　古典を読む』は大変評判がよかった。それを、野間宏が『文学界』で三回に渡って取り上げた。(1)「話題の本を読む」と題した連載である。その冒頭で、野間は「川村次郎氏の『里見八犬伝』（岩波書店刊）は、まことに面白く、塞いでいた眼を、決して無理矢理にではなく、またいつの間にかというような有様でもなく、開かれるとい

うあざやかな技が、始めから終りまで、よく振られていて、一冊の書物でありながら、優に六、七冊の書物を読んだという思いのする書物である。しかもこの充足し、心身に行きわたった思いは、長く消えることがない。[2]」と語り、川村の評論を絶賛した。そこでは、野間の表題「『里見八犬伝』を透して」に見られるように、意識的に八犬伝の問題を通り越し、まさに「透して」、近代文学の問題から、さらに近代という時代に対する問題にまで、読者の視野を広げていった。これは、もとより、『八犬伝』で馬琴が意図した事ではあり得ない。しかし、近代を客観視して、考え直す時期となった現在では、近代をくぐり抜けて来たこの作品を通じて、これまでに、この作品につみ重なってきた評価や、さまざまな〝読み〟を通じて、時代そのものへの思索が可能になった事をしめしている。

川村のこの評論とその好評は、『南総里見八犬伝』についての評価変更に拍車をかけたといえるだろう。もともと『南総里見八犬伝』否定が近代文学の出発点だった事から、その評価の変化は、坪内逍遙以来の近代文学の方向の修正を意味していた。近代からの離脱が模索されはじめる度に、『南総里見八犬伝』の評価が変化したとも言える。

最近の『八犬伝』評価の変化で、ひとつのきっかけを作ったのは一九七三年（昭和48年）四月からＮＨＫテレビで放映された『新・八犬伝』だろう。古典文学の再評価が、文学評論や研究論文として出現したのではなく、媒体を変えて、直接享受者に働きかける事によってなされた点で、この現象は今後のメディア変化を占うものである。その結果、評論や研究からのリードではなく、自身が受容した作品像を持った読者が現れたのである。[3] しかもその範囲は広大だった。

この状況を背景に『南総里見八犬伝』に関する現象は続く。一九八〇年（昭和55年）には高田衛の『八犬伝の世界』（中公新書）、一九八二年（昭和57年）からの山田風太郎による『朝日新聞』での連載、一九八四年（昭和59年）正月封切りの角川映画『里見八犬伝』と、『南総里見八犬伝』は研究者の机上から、面白い読物を求める読者の間に、あたかも

玉のとび散る如く、広く浸透していったのである。

こうした現象を背景にした川村の評論は、近代的リアリズムとその基盤となった近代的合理主義に対抗するものを『八犬伝』に見ていた。「時には煩わしいまでに実の根と葉をはびこらせ繁らせて、その上に巨大な嘘の実をみのらせた物語の成果」[4]というのがその認識である。これは、馬琴が方法として、作品の中に、読者が実在感をもって認識できる要因を緻密に配置しながら、全体として、有り得ない世界を構築した事を言っているのである。つまり、個別の事実と統合の虚構という方法であり、それを仮想現実と呼ぶことができるだろう。川村は、『南総里見八犬伝』の構成要素をこのように認識したのである。そして、この認識を基盤に、「近代文学」の読者に『南総里見八犬伝』の、娯楽読物を越える受容を促した[5]。

この仮想現実は、空間的認識を例に説明されている[6]。それは、高田衛が『八犬伝の世界』で「「江戸」古地誌と開拓郷民幻想」という節をたてて説いた内容と一対になっている。『南総里見八犬伝』に現れる地名は江戸時代に実在した地名であるが、表現された結果は、読者の知るその土地の姿とは異なっていた。地名は実在するが、書かれたものは虚構であるという形である。二人の論者はそこから各々の見解を展開するが、この指摘自体は共通している。

読者に現実感を持たせるために、実在するもの（地名）に依拠するという方法がここでは採られた。作品世界を創造するにあたって、作品外世界の構造を借用して成功したという事である。その作品外の世界は、何の説明もいらない。それは、読者が日常的に親しんでいる世界であったからである[7]。

『南総里見八犬伝』は確かに、強固な作品世界を作っている。その中の人物は綿密に関係し、その時空は確固とした構造を持っていた。しかし、だからといって、この仮想現実が、作品内部だけで完成していたのではない。作品内部に

むかう、外からの無数のチャンネルが存在しており、『南総里見八犬伝』という虚構世界を活性化していたのである。[8]

二

『南総里見八犬伝』の内部を支える構造として、川村は「女の呪い」を上げた。この呪いによって生じた葛藤がこの小説の基調であるとした。フロイト・ユングの文学、文化の概念に馴染んでいる現代の読者にとって、これは大変わかりやすい整理である。この主題は『南総里見八犬伝』の内部で完結しており、作品の外部から提供される情報は、この主題を活かす背景となっている。このように受け取る時は、この作品は、現代人にとっても、前提となる特別の知識なしで、読むことが出来るのである。[9]

「女の呪い」は「伏姫の話」としてまとめる事ができる。この呪いが伏姫を媒介にして八犬伝の主筋である八犬士の発生に結び付いているからである。「伏姫の話」にはそれ自体の導入がある。そこには、どうして伏姫の事件が発生したかが順を追って展開される。伏姫譚を八犬伝の発端とするなら、これは発端の発端になる。

これについて、少し説明しておく。

里見義実は、結城の合戦の落武者で、結城から三浦を経由して安房に来る。その間に龍を見るなどの祥瑞にあう。一方安房では、神餘、安西、麻呂の三家の領主の内、神餘長狭介が酒色にふけり奸臣山下定包に殺され、山下は神餘の領地を簒奪しその妾玉梓を手に入れる。安西・麻呂が、山下への対策を協議するところに義実が到着する。義実の有能を危険視した安西は義実に難題を与え、殺害を謀る。神餘の忠臣金碗孝吉にめぐりあった義実はその助けを得て、独自に

山下を倒すが、その虚に乗じて、安西はもう一人の安房領主である麻呂の領地を横領する。山下の妾玉梓は義実が自分の助命に応じた言葉を翻した事を怨み里見家を呪う。

「女の呪い」が成立する前に、その「呪い」の原因を里見義実が作る必要がある。その遠因は結城の合戦であった。結城の合戦の落武者である里見義実がいかにして安房に里見家を樹立したかが、「呪い」のからむ事情なのである。

この部分は義実流浪譚として一編の物語となる可能性をもっていた。[10] しかし、馬琴は、「八犬士傳の発端なれば」と『犬夷評判記』でこの部分が作品全体に対して、従属的な位置にある事を示していた。この作品の本体は「八犬士傳」なのである。この馬琴の発言をもとづけば、馬琴が考えていた作品の本体である、八犬士の発生と受難の原因として、近年の評者は、「女の呪い」を見ているという事になる。

「呪い」に至る過程を、読者に納得させるべき機能をもった義実譚について、作家は、『犬夷評判記』で「要なき事は省けり」とした事を言明する。そして、「しれたる事は看官に、預けてしるしつけざりき、」(『江戸名物評判記集成』P346 岩波書店)と、「しれたる事」つまり作品の外で読者の知識に委ねられる事は省略したと宣言している。[11] 作品に記されている事だけでも、「呪い」の発生原因は理解できるはずである。そうでなければ作品の現在に及ぶ普遍性は保てない。けれど、原因の持つ性格を把握するには、作家が読者に委ねた部分、つまりこの「しれたる事」を理解しておく必要がある。

「しれたる事」は読者と作家が共有する日常の無意識的な領域まで含み込み、広大になる。しかし、作家は、読者に参照して欲しい事象を明示して、読者に「しれたる事」の読み取りを一任してしまう事もできる。故事や人物の事績を

示して、その意味については、読者の知識にゆだねるのである。あるいは、その知識についての探索を読者に課するわけである。

たとえば、『南総里見八犬伝』第一回の白龍の出現はよく知られた場面でだが、その直前に、安房に渡ろうとしていた義実は、三浦で土地の者に食と船を乞い、土をぶつけられてしまった。

いきどおる従者の杉倉にたいして、「木曾介大人気なし、麒驥も老ては駑馬に劣り、鸞鳳も窮すれば、蟻螂の為に苦めらる。昨はきのふ、今はけふ。よるべなき身を忘れし歟。彼等は敵手に足らぬもの也。つら〳〵ものを案するに、土はこれ国の基也。われ今安房へ渡るに及びて、天その国をたまふの兆歟。彼を無礼也と見るときは、憎むに堪たり。これを吉祥とするときは、欽ぶべき事ならずや。晋の文公が五鹿「曹国の地名也」の故事。よく今日のことに似たり。賀すべし〳〵。とみづから祝して、塊を三度戴き。そがま、懐へ挟たまへば、氏元もや、暁て、刀の鞆に掛し手と、共に怒りを鮮おさめ、そのゆくすゑは憑しき、主君を壽き奉れは、白水郎が子どもは掌を拍て、いよ〳〵あざみ笑ひけり。」（上P27[12]）

義実がその土くれをいただいて思い起こすのは晋の文公の五鹿の故事である。

これは『史記世家』『国語晋語』などに記される出来事で、驪姫の乱を避けて流浪した文公が五鹿で土地の者に土を投げかけられたが、これを瑞兆とした故事による。

「重耳居狄凡十二年而去。過衛。衛文公不礼。去過五鹿。飢而従野人乞食。野人盛土器中進之。重耳怒。趙衰曰、土者有土也。君其拝受之。」（明治書院新釈漢文大系『史記』（五）「世家」P340）

『史記』の出来事では、文公は怒り、趙衰がなだめているが、『南総里見八犬伝』ではそれが逆転している。義実の名

君性が強調されるのである。そして、この出来事の直後に白龍があらわれるのであり、義実の安房での栄達が予測される場面になっている。

安房の里見については、『北条五代記』を始めとして、その勃興の顚末は江戸の人々にある程度知られていた。『南総里見八犬伝』の読者がここで、義実の将来に不安を持ったとは考えられない。いわば「約束」として、義実が安房の領主となる事は読者の期待に属していた。[13] その流離譚の中で、語られるべき事は、流離する主人公の受難であった。これに筆を費やす事はこの部分の性格上出来ないのであるから、「しれたる事」としてこれを処理するためには、適当な歴史上の存在が参照される事が望ましかったのである。同時に、その前兆がいかに義実の安房領有にふさわしく設定されるかに作家の技量がかかっていたはずだ。晋文公の参照が義実の形象の一部を担ったのである。

後にこの場面は常盤津に採られて『悪太郎』の曲名が付されるが、そこからもわかるようになかなかの名文である。また、義実に土塊を投げつけ、啓示を与える「悪太郎」は魅力的な形象である。『頼豪阿闍梨怪鼠伝』[14] に登場し、西行の金の猫を争う大童のように、馬琴の作品に現れる当時の若者の一例である。

「年十四五なる悪太郎、赤熊に似たる額髪、潮風に吹黒れし、顔に垂るゝを掻も揚ず、揉断るごとき青洟を、啜り籠つゝすゝみ出、痴たることをいふ人かな。打つゞく合戦に、舩は過半借とられて、漁猟だにも物足らぬに、誰か前向へ人をわたさん。されば又この浦に、汲む塩よりもからき世は、わが腹ひとつ肥しかぬるに、馴もえしらぬ人の飢を、救ふべき糧はなし。堪がたきまで脾撓くは、これを食へ。とあざみ誇て、塊を掻取つゝ、投かけんとする程に、…」（上P26）

こうした微細な登場人物の与える現実感は、基盤にある『史記』の故事に対する馬琴の肉付けであって、このエピソ

ードを単に『史記』の引き写しにとどめていない。こうした肉付が馬琴の作品を虚構の世界から当時の現実に架橋するのである。

興隆が予定されている落ち武者によって、晋文公は参照するのに最適といえる存在である。馬琴は義実に対して、しばしば文公を使う。山下定包を攻略する時、金碗等の軍略を批判して義実は、

「おもふにいにしへの聖王賢将、仁義の軍を起すものから、詭りをもて捷ことをはからず、唐山晋の文公は、詭を用ずして、五伯の一と稱せられ、よく周室を佐たり。孫呉が兵法、詭道を旨とす。こは戦国の習俗也、策よしといふとも、詭をもて敵を滅し、その土地をたもつときは、何をもて民を教ん。」（上P81）

と自ら晋文公の行動が彼の手本である事を示し、その功績を認定している。

これは義実によって自任されているのみならず、他からの評価でも彼の行為が文公に重ねられる。それは、義実が山下討伐に成功し、安西が麻呂の領地を横領した後に、安西が家臣蕪戸訥平を義実の元に派遣して、言わせる詞に見える。

「晋の文公が、曹を過りし憾に似つらめ、しかれどもその事なくは、誰か君を激して、この大業を興すに至らん。實を推せば初めより、大かたならず君を思ふ、景連が寸志にて、假に強顔もてなしたり」（上P99）

ここでは相手側からも、義実は晋文公に擬せられているのである。

文公の故事の背景には、驪姫という女が居て、文公の受難譚の原因となった。文公の故事を知る読者は、女性による英雄の受難という期待を『南総里見八犬伝』のこの部分で抱く可能性もあっただろう。

「しれたる事」の一つである晋文公の故事は、義実譚における義実の形象の一部を担っていたわけである。この「しれたる事」で作られたのは、呪いの対象になる側の徳性であった。これはこの先にも展開していく。その過程を見なが

ら、その徳性について検討して見たい。

三

伏姫と八房が富山に入る直接の原因となった安西と里見の合戦も、この文公譚と対応する。これも『史記』世家の記述から借用である。

晋恵公四年（僖公十三年）に晋が飢饉に見舞われ秦に食料援助を依頼した。秦では虢豹が晋を討つ事を主張したが、「其君是悪、其民何罪」と秦繆公は晋への食料援助を行った。ところが翌年秦が飢饉に見舞われた時、晋は秦を攻め却て秦によって攻められて晋恵公は虜になつた。

『南総里見八犬伝』第八回から九回にかけてに設定された里見と安西の関係は、秦と晋の関係を元にしている。ここでは、安西が晋の恵公であり、里見が秦であるが、起こった事は同じであった。まず、安西が凶作で里見から食料を借り、翌年、里見が凶作で安西から米の返却をうけようとした時に、安西は里見を討つ。この基本構造に一致がみられる。ここでは、晋が不義になっている。『史記』では、この事件に先だって、驪姫に追われていた晋の恵公が、秦の援助で晋に帰り位に就く事が出来た事情が記される。恵公はその時に秦に領土の一部の割譲を約束していながら、晋で位に就いた後、それを果たさなかった。

恵公と文公の関係は、どちらも驪姫に追われた晋の公子ではあったが、両者は晋の主権をめぐって対立・競合する関係にあった。文公の立場に立てば、恵公は秦との信頼関係を崩壊させた事をはじめ、いくつかの、君主としての資格の欠如があった。また、関係を逆に見れば、文公は恵公と秦との亀裂に乗じて主権を簒奪した者となる。この関係を『史

記』などは、文公の徳義を強調する事で、その即位を正統化して済ませる。ここで安西によってとられた晋恵公と同じ行動は、文公に対立する存在としての恵公がとった行動になる。義実はそれに対して、文公の行動、つまり義にかなった行動を選択する者として描かれる。この場面で義実は、表面的には秦繆公の行動をとる者として設定されるが、恵公の不義と対立する上で、文公になぞらえられる資格を保持し続けるのである。

里見と安西の関係で、安西は、里見の山下討伐の機に乗じてもう一人の領主麻呂の領地を併呑した。この行為について、近代の評者は、歴史上の戦国期の武将として当然の行為とこれを捉える。これは近代人の推論で、馬琴はそのように設定はしていない。安西の行動は、里見の反乱によって窮地に陥った山下の求めに応じて麻呂と共同して出兵しながら、麻呂を裏切って、里見側に殺させ、麻呂の領地を横領するというものであった。結果としては、その行動から利益を得た義実だが、彼はこれを「奸計」（江戸名著P98）と呼び、安西の人となりを「梟雄」（江戸名著P99）としている。晋と秦の関係のように、領土を繞る明らかな契約違反が存在したのではないが、馬琴は晋の秦に対する不信義に近付けて安西と里見の関係を設定したといえるだろう。

そもそも安西と義実の関係は、麻呂の領地を繞る問題以前に、義実が安房に漂着した時の処遇から、敵対関係に陥っていた。この時、安西は明らかに義実の殺害を謀ったのである。この事について安西は、山下討伐に成功した義実の元に使者を派遣し、前掲の引用のような説明をしていた。馬琴は、義実には、晋の文公の形象を取らせて、文公と対立関係にあり、不義であった前代の恵公の事蹟を安西に当てはめ、この二つの形象の間に対立を設定したのである。『史記』などにおける晋文公の場合には、拡散したものになっていた対立相手を安西一人に代表させたのである。

晋の故事からの趣向は八犬士の列伝になってからも登場する。これも有名な場面になるが、犬川荘介が犬田小文吾と

ともに、箙大刀自に捉えられ、家老稲戸由充に助けられた時に、「晩生儻幸に良主に仕へて、一軍の、大将を奉り、料らずも長尾殿と、鋒を交ることあらば、為に三舎を退くべし。」（上、P205）と誓いを立てる。その結果、第百六十二回で稲戸の指揮する長尾の部隊に遭遇した荘介は、「今この地方にて、其誓言を果すに至流は、二たび得かたき欽ひなれ。」（下P447）と、撤退する。この時に荘介は、里見家に臣従する者としての義務を長尾隊の旗を射切る事で果たす。「恁はいへども、今日の事は是、我君の命令也。人情をもて私議すべからず。公道人情両ながら、虧ず盈ざる術こそあれ。」（下P447）と「公道人情」にかなう行為として荘介は自任している。これを受けた由充側も、「我意ふに、晋文公、三舎を避る事あり。三舎は、幾里なるを知らず。」とその行為を文公になぞらえて理解していた。

晋の故事と『南総里見八犬伝』との関係については、より詳細な検討が必要であろう。ここに取り上げた部分だけでも、里見家側、つまり『南総里見八犬伝』の主人公側に、晋が戦国の雄として、政治倫理的に肯定できる側面で、あてはめられている。それは、「唐山晋の文公は、詭を用ずして、五伯の一と稱せられ、よく周室を佐たり。」という前掲の義実の発言に見られるように、諸侯の一員としての評価による。これは肇輯の序文の冒頭「初里見氏興於安房也。徳誼以率衆。英略以摧堅。平呑二総。傳十世。威服八州。良為百將冠。」でも明確にするように、里見家の範囲が「八州」に限られた存在であった事に対応している。

馬琴の形象した里見家の性格は、統治の頂上に存在するものではなく、統治の枠の中で正統に発展した、このましい一家であるに過ぎなかった。その好ましい性格を現すのに、馬琴は作品外の故事である晋文公を借り、効果的に利用したのである。

この好ましい一家に起こる悲劇が伏姫の事件になるのであるが、その原因となったものは義実の「口の過」である。(15)

この卑近なテーマは、処女作であった『盡用而二分狂言』[16]から存在していた。「仁義八行の化物」と言われる馬琴の登場人物が誤りを犯し、その誤りが原因で物語が展開する事は、これも幾多の指摘が出来る。[17] そしてそれによって「女の呪い」が引き出される。その結果八犬士が登場するのである。

『南総里見八犬伝』に限らず、善主人公の誤りによって引き起こされる出来事は、主人公の側に属する非常に大きく、しかも強力な徳性によって解消される。たしかに、作品を構成する事件は、この「誤り」を原因として与えられる。しかし、その解決は保証されているのであり、読者はその解決の過程を作者の案内で楽しむ事になる。そして解決の保証は、作品全体を包む主人公の徳性の保証の上に成り立っている。『南総里見八犬伝』における「女の呪い」は重要な要素ではあるが、それを作品のすべてと見ると、馬琴の狙いからは外れる恐れが出てくるのである。

四

諸侯としての里見とは、どのような家であったのか。「しらずや足利持氏ぬしは、譜代相傳の主君にあらず、抑わが祖は一族たる、新田義貞朝臣に従ひて、元弘建武に戦功あり、しかりしより新田の餘類、南朝の忠臣たれども、明徳三年の冬のはじめ、南帝入洛ましくて、憑む樹下雨漏りしより、こゝろならずも鎌倉なる、足利家の招きに随ひたまひし、亡父は〈里見大炊介元義〉満兼主〈持氏の父〉に出仕し、われは持氏ぬしにつかへて、今幼君の為に死す。志は致したり。これらの理義を辨へすは、只死するをのみ武士といはんや。学問も又そのかひなし。」（上P19）と『南総里見八犬伝』第一輯巻一の冒頭で、里見季基が息子義実を諭す。馬琴が畢世の大作の主人公として選び、晋文公の形象を付加した対象は南朝の忠臣の末裔であった。

里見家が新田の支族であった事は、里見家に関する諸記録でも確認できる。また『三河国後風土記』にも世良田徳川家と近い関係にある氏族として里見家の名が見えている。徳川家もまた、新田の支族として位置付けられ、南朝につながるとされていた。[18] 江戸時代全体の南朝贔屓や、その徳川賛美との関係は別に考える機会があるので、今は控えるが、馬琴に関しても、南北朝の前後を主題にした作品で、北朝側に立つものはほとんど無い。[19]『南総里見八犬伝』と時期を前後して書かれた作品では、『近世説美少年録』の菊池、『開巻驚奇俠客傳』の新田・楠のように、特に南朝方への傾斜が激しく、こうした傾向は、幕末の動向にも絡んで展開して行くのである。[20]

馬琴が足利体制の賛美者として里見家を設定しているとは考えられない。作品の内部では、親兵衛の在京時期の活躍が足利政権への批判となっている事は、明らかである。そうした場面から考えて、南帝の忠臣であった事の強調は、里見家の性格を方向付けているのである。

その方向付けを考える上で、参照すべきは『開巻驚奇俠客傳』であろう。この作品と『南総里見八犬伝』の関係として、この作品の執筆と同時に、『南総里見八犬伝』の中に「俠」と称せられる人物が増加する傾向を以前に指摘したが、[21]『開巻驚奇俠客傳』の主題が『南総里見八犬伝』の中に流入し、『開巻驚奇俠客傳』の中断後も続いていた事は、考慮すべき事象だろう。『開巻驚奇俠客傳』の持っていた南朝を正統としつつ、現実の政権に対しての反乱を抑制する思考は、『南総里見八犬伝』に投影して行くと考えられる。

『南総里見八犬伝』の中の里見家が、単純に足利の体制を受け入れているならば、それは馬琴のこの時代の善なる主人公としては失格である。しかし、同時に、『開巻驚奇俠客傳』で説いているように、正義のためとは言え、世の動乱を起こして人々を艱苦に導く事も又善主人公としての資格を欠く事になる。これは、『頼豪阿闍梨怪鼠傳』の結末とも関連

してくるし、『椿説弓張月』に於ける為朝の行動にも関わってくる。[22] これらの主人公に共通する状況は、心ならずも、不正の横行する非友好的な環境に身を置いて、しかも、その環境そのものを崩壊させる事はできないという状態である。そこにおいて、どのように身を処したらよいかという閉塞時期の対処法なのである。[23] 里見家は、家全体でそうした状況に置かれる。これは、規模こそ違え、信乃が体験した大塚村での状況にそのまま移行が出来るのである。

馬琴が設定した諸侯としての里見家は、現政権に対して、その正統性を疑いつつも秩序維持の任にたえなければ成らない。正統性への疑問は、南北朝に遡る根底的な問題からまず発するだろう。次に、結城の合戦とその処置に対する里見家の態度が問題になる。[24]

先の引用部分には、関東公方に対する忠義は、父季基の戦死によって解消するという考えが示される。義実は家を再興するために戦場を離脱する。ここでの里見家は、既に臣従する対象を喪っているのである。この季基の戦死に際して、それに殉じた八人の家臣がいた。これは季基に対する忠義であると同時に、義実を通じて里見家を存続させるべく、行われた忠義でもある。里見の家を守る忠臣の八人であったのだ。

「季基は落てゆく、わが子を霎時目送りつ、今はしも心やすし、さらば最期をいそがんとて、靮かい繰り、馬騎かへして、十騎に足らぬ残兵を、鶴翼に備つ、、群り來つる大軍へ会釋もなく突て入る。勇将の下に弱卒なければ、主も家隷も二騎三騎、敵を撃ざるものはなく、願ふ所は義実を、後やすく落さん、と思ふ外又他事なければ、目にあまる大軍を、一足も進せず、躬方の死骸を踏踰て、引組では刺ちがへ、おなじ枕に臥ほどに、大将季基はいふもさらなり、八騎の従卒一人も残らず、僉乱軍の中に撃れて、鮮血は野逕の草葉を染、…」（P23）

この第一回の記述は、「十騎に足らぬ残兵を」とさりげなく数を限定しながら、その非凡な忠義と活躍を述べた上で、

実数が八であった事を示している。

この趣向は『仮名手本忠臣蔵』の大序の設定に類似する。『忠臣蔵』の趣向は、当時の読者の誰もが悉知していたろう。それだけに、それを強調する事は、作家としては、「陳腐」になる事を防ぐ必要があったはずだ。それにもかかわらず、ここに「八騎の従卒」の戦死を設定した事は、この趣向に馬琴のなにがしかの意図が秘められているからである。

『忠臣蔵』は南朝の忠臣新田義貞の兜改めから始まる。この時に登場する義貞以外の兜四十七鉢が四十七士になるのである。これは四十七士の登場の予告として受け取るよりは、忠臣として転生すると見るべきである。この時に、転生する先は、南朝方の武将のもとではなく、足利の武将のもとに転生して、そこで忠義を尽くすのである。この忠義は、足利方幕府の乱脈、具体的には権臣の横暴によって引き起こされるものだった。

馬琴の足利幕府観は『近世説美少年録』の次の箇所にも詳しい。

「されば、繻葛倒に罹り、冠履地を易るに至りし、縁故を原るに、最も恐きことながら、等持院尊氏卿、さしも後醍醐天皇の、寵恩を讐もて復し、南北朝両天子の、御位争ひにとり成して、逆に取て逆に守りたまひし、餘殃眼前に報ひ来て、直義直冬、師直等の逆乱に、父子兄弟攻戦ひ、家臣は主君を禁錮たり。是よりして清氏直常、氏清義弘等謀反して、君臣下刻上の戦ひ絶ず。鎌倉の管領、諸国の領主も、亦かくの如くにして、終に嘉吉応仁の大乱ここに極りぬ。便是汝に出て、汝に返るものなるを、前轍屢覆れども、後車の誡を知ずして、これを恨むは愚にこそ。然は思ひたまはずや。」(『近世説美少年録』第二回。叢書江戸文庫　上、P43)

『近世説美少年録』で素陀六、つまり白蛇の化身がこのように分析した室町時代は、君臣関係の乱れを原因として戦国時代に陥っていく。ほぼ同時代に成立したのが安房里見であった。そこは時代の風潮とは異なって、秩序ある体制が

とられていたのである。

五

馬琴が「女の呪い」によって始めたこの作品の主要な事件の外側には、足利幕府についての馬琴の見方が存在した。それは南北朝正統論にからむ歴史観であり、当然それは、当代、つまり徳川の体制とも無縁ではない問題であった。

作品の外側から読者に作品の理解のための情報を供給するのは、作者が参照を指示するのではなく、読者がその作品に触れる以前の知的経験である場合もある。これは地名などの作家と読者が共有する日常的な知識だけでなく、歴史観などの抽象的な知的共有基盤であっても良い。どちらも作品の活性化と作品に関わる人々の共同意識を創造する。読者は、作品の中に展開されている既知の歴史観を読む事によって確認し、より確かなものとしていくのである。

この歴史観に基づいて、室町の乱脈に対峙するのが里見家の徳である。「女の呪い」を八犬士傳の起源として捉えた場合、その受難から抜け出す事が出来るのは「女の呪い」以前に成立している主人公の徳性による。それは里見家の徳と重なり、作品内ではそれに対して守護が加えられるからである。

義実を祖とする安房里見家の徳は何だったか。心ならずも統治者に対して、節度を守りながらその諸侯としての立場を守った事である。つまり領内の治安を、危機に直面しながらも維持した事である。君臣秩序の崩壊期に、秩序の回復に必要な資格を備え、局地的にではあるが秩序を回復させた事にその徳は現れたのである。

里見家の「仁」は既に『北条五代記』に強調される所であった。巻三の二「房州里見家の事」冒頭には「主君里見義高、仁を第一とし給へば、諸侍皆仁の道を、をこなふ仁者かならず勇ありと云々。」とあり、これらの通俗軍書を通じて

里見の徳性についての読者の知識が存在していたのである。この徳に対して、馬琴は読本としての意味を付加した。それは、秩序回復者、とりわけ戦国からの秩序回復者としての働きである。それは戦国からの国家的救済者としての神君、徳川家康のアナロジーであるともいえるだろう。里見家の功績は、安房の平和を確立した事であり、それが崩れる事によって終っているのである。この崩壊を幕末の徳川政権と同一視はできない。馬琴の知る限りの徳川幕府は、少なくとも父親を喪って、将来が不安な孫の太郎を委ねられる程度には確かな存在であったのだから。(25)

義実を晋の文公になぞらえる時、馬琴は義実の形象の不足部分を、『史記』なり『国語』なりを通じて、江戸の読書人が知っていた形象を用いて補う事が出来る。読者はその部分を読んで、その故事を知らなかった場合でも、晋文公を鍵に書物を調べる事ができる。このリファレンスの可能性を作家は知っていた。諸侯としての里見はこれで位置づける事ができる。この下に八犬士は位置付けられる。この構造で、この作品は、諸侯に仕える家臣、つまり陪臣が主人公になっている事を確認できるだろう。その視点は、天下を論ずるにあたっても、下から俯瞰する視点であったのだ。

高田衛は『八犬伝の世界』の中で、八犬士の原基的イメージを八字文殊曼陀羅に登場する八大童子に求めた。この説には今後に更なる展開が必要である。しかし、今見る所に限って指摘するならば、『太平記』において八字文殊法は文観と結び付いていた。(26) 何かと問題の多いこの僧は、この法を後醍醐のために行った。それは『太平記』にも描かれている。『太平記』の視点が国人層の視点であるなら、それを受け継ぐ近世の下級武士達の視点は、『南総里見八犬伝』になる。『太平記』は幕末期に倒幕の書となる。同様に『南総里見八犬伝』も倒幕の意味を担わせられる。(20) しかし、この倒幕意識は、近代・現代から見た、結果としての近代天皇制を支えたに過ぎない。その天皇制が近代化当初にどの程度強固な

ものであったのかは、例えば福沢諭吉の『尊皇論』はその例証になりそうだ。明治二十一年のこの論は、天皇制に対する合理的説明が欠如している事を上げ、たとえ尊王論者であっても、「單に帝室なるが故に帝室にして尊厳神聖なり」と説くという状態であったとし、それを「經世上に尊王の要用を説き、以て他を滿足せしめて、人情と道理と兩様の點より、ます〳〵其尊王心を養成せんと欲する者なり。」（全集六P6）と自己の立論の狙いを言う。東京の皇居の修造が出来た時期であり、憲法発布を控えている時期でもあった。にも関わらず天皇の社会的意味付けは充分ではなかったのである。それは明治政府の宿命でもあったろうが、維新を天皇制による革命とは見なし憎い理由の一つである。

ここに一言付言するのは、『南総里見八犬伝』に盛り込まれている事象から、近代の天皇制や、より一般的な王権に論を展開する時には、当時が継承したそれらの概念の各項と近代における各項との検討が必要だという事なのである。

注記

一

（1）『文学界』一九八五年（昭和60）二月～四月号（三十九巻二号～四号）「話題の本を読む—川村次郎『里見八犬伝』」

（2）『文学界』一九八五年（昭和60）二月号

（3）拙稿「いまどきの八犬士」『讀本研究　六輯』（広島文教女子大学研究出版部『讀本研究』編集部・平成四年一〇月）で、若い人達の同人漫画誌を中心とする『南総里見八犬伝』受容についてまとめて見た。

（4）『里見八犬伝　古典を読む』（岩波書店・1984・10・19）川村二郎P126

（5）川村は、『里見八犬伝　古典を読む』（岩波書店・1984・10・19）の最期で、犬塚信乃に関する記述を取り上げ、「それはさながら、生きながらすでに死を迎えているかのようである。全体を表現しようとする意図が、生のみならず死までも、克明な記述の範囲内にとりこんでしまっている所に、『八犬伝』の、近代小説とは異質の、しかも、近代小説の側に驚嘆

と羨望を誘い出さずにはいないであろう、独自の面目がある。」と述べ、また、この評論の最後、「後書」をP233「反近代主義などという旗標を掲げる気持ちは毛頭ないけれども、いわゆる近代の特徴が濃厚な思想文芸には何となくなじめない。そうした気質の人間が書いたこれは『八犬伝』印象記である。国文学の研究者ではなく、文学とか、小説とかいうものを読むのが好きな読者を念頭において書いた。ただ、小説の好きな読者は普通近代小説を読みなれているだろうし、『八犬伝』にその慣れでもって対面したら戸惑うのではなかろうか、と思った所で、近代小説とは違うのだということを少し理屈っぽく強調しすぎたかもしれない。ともかく美人の容貌を言葉で形容するのは容易ではない。興味を抱かれた方は直接美人に会いに行って下さいと申し上げたい。」と結んでいる。すでに近代文学に飽き足らなくなっているであろう近代文学読者に対して、異なる価値を持つ文学として『八犬伝』の存在を知らせようとする意図がここには感じられる。

(6) 四章「幻の名所図会」(『里見八犬伝　古典を読む』)

(7) ベネディクト・アンダーソンは、ホセ・リサールの小説『ノリ・メ・タンヘレ』の冒頭を取り上げて、その機能について論じた。

『ノリ・メ・タンヘレ』の冒頭は以下のようになっている。

「ドン・サンティアゴ・デ・ロス・サントスは、一八八〇年代の十月末のある夕刻、晩餐会を催していた。その晩餐会のことは、彼のいつものやり方とちがって、当日の午後になってやっと通知されたにもかかわらず、彼が住んでいるビノンドおよびマニラの他の地区、さらにイントラムーロスのスペイン人の城塞都市においてすら、すぐに人々の話題となった。―(略)―この日の晩餐会は、アンロアゲ街にある家で催されたが、地震ででも潰されていないかぎり、今でもその家はそこに見出されるはずである。」

それについて、アンダーソンは、

「くだくだしい説明はもちろん不要だろう。ただこのことだけ注意すればよい。つまり、まさにその冒頭から、ある特定の年代の特定の月にマニラのまったく違う街に住むおたがい知りもしなければ名も与えられない数百もの人々が晩餐会のことを話している、この〈フィリピン人の作品にはまったく新しい〉イメージ、それはただちに想像の共同体を心のなかに思い浮かばせるものである。そして、「アンロアゲ街にある家……今でもその家はそこに見いだされる

はずである」という表現において、その家を見出すのは、我々フィリピン人読者である。小説の「内的」時間から〈マニラ〉の読者の日常生活の「外的」時間へと、この家がなにげなくふっと移動していくこと、これは、小説の登場人物、著者と読者、すべてを抱擁して暦の時間に沿って進んでいく単一の共同体の堅牢さを暗に確証している。語調についても注意する必要がある。リサールは彼の読者個々人が一体どういう人物であるか、そんなことは知るはずもない。しかし、それにもかかわらず、かれらの間柄に疑わしいことなどちっともないかのように、皮肉っぽい親密さで、読者に語りかけるように書いている。」（『想像の共同体』りぶろぽーと、ベネディクト・アンダーソン　P47）と論じている。実在のマニラという都市にいる読者達をこの小説の内部に移入するために、作品の内部のマニラから、現実のマニラへ向けて扉を設定しているのである。これは、何もフイリピンの小説を持ち出すまでもなく、バルザックやスチブンソンが既に行っていた。しかし、アンダーソンが追求する民族主義的ナショナリズムにあきらかに関わる点では、ホセ・リサールの作品を取り上げる事が適切であったろう。ナショナリズムの原型となる共同体意識は、或は共同幻想の過程とこれを見る事ができる。馬琴とその時代の文学にこうした傾向が見られる事は、この技法が作品のリアリティを増す以上の効果があったことを意味している。

（8）馬琴は、読者にとって日常的なものの描写を積み重ねているが、一方で些末な日常描写には組みしない。『犬夷評判記』（『江戸名物評判記集成』P345）「理屈によつて小説の、趣を質問せバ、横死せし人ある処にハ、ナゼ店請が見えぬといハん、かくて理外の幻境に、遊んことハ難かるべし、」という発言は、作品構成に現実描写を登用するについて、意図的な選択が行われていた事を意味する。

二

（9）そのさらなる展開は小谷野敦『八犬伝綺想』（福武書店一九九〇）がある。

（10）『犬夷評判記』「義実安西を減ぼして、安房をうち従へる迄を、一期とする物語の結局ならバ、その事かならずなくてハ稱ハず、すべて義実の安房を領する条々ハ、八犬士傳の発端なれバ、苟にも要なき事は省けり、・・・・」（『江戸名物評判記集成』P345）また、里見家の安房での興隆を題材にした黒本『安房州里見合戦』（安永八年　一七七九年鱗方屋黒本の再版であるが黄表紙の年代に含まれるものとして黄表紙に入れる考え方もある。→『黄表紙総覧前編』・棚橋正博）がある。なお本書は『北条五代記』による所が大きい・丹和浩氏御教示、詳細は氏の御論考を待ちたい。

(11) 『犬夷評判記』の記述がそのまま馬琴の作品解説となりうるかどうかについては、留保が必要であるが、作家が自分の作品について公に発言したものである事は確認しておきたい。

(12) 以下『南総里見八犬伝』の引用は、日本名著全集刊行会刊行、日本名著全集、江戸文芸之部『南総里見八犬伝』（上・中・下）三冊による。

(13) 読者の期待の形成と、その効果的な運用は、作者の構成力に関わっている。山東京山の場合にはこうした所で作者が説明をおこない、作品の展開を保証している。拙稿『不才の作者』（『近世文字論叢』明治書院）

(14) 『頼豪阿闍梨怪鼠傳』第十套（巻五、七丁）こうした市井の若者が馬琴の現実に存在していたという推測は、『近世説美少年録』を取り上げながら、野口武彦が『江戸と悪―『八犬伝』と馬琴の世界』（角川書店平成四年）で「天保の世相のもとでは、こんなたぐいの虞犯少年がごろごろしていたことだろう。まさかモデルがあったとまではいわぬまでも、ことによったら馬琴は、自分でも気づかぬうちに、身近でみたあれやこれやの顔つきを、『美少年録』の「稗説伝奇架空」（『童子訓』第三版序）のうちに写し取っていたのかもしれないのである。桂月の「社会の境遇」という評判が生まれるゆえんである。」といっている事に見られる。また、氏家幹人『江戸の少年』（平凡社）には、そうした少年達が幕末近い時期に実在していた事を記述している。

三

(15) 「縁故を推ときは、ひとり義実が愆より起れり、物がいはせて八房に、伏姫を許せしは、赦すまじき玉梓を、助んといひし口の過。言葉の露は未竟に、この渓澗に落あふて、くるしき山に生死の、海を見るこそ悲しけれ。」（上P176）という、伏姫の死に臨んでの義実の述懐がある。

(16) 「いずれにしても、ここで注意しておきたいのは、「口は禍の門」というモチーフが単に本作の趣向として使われただけでなく、馬琴の中に長い間根強くあった考え方だと思われることで、ずっと後年の『南総里見八犬伝』でも、「三歳に成っても話せない」伏姫と「一言の失ち」から娘を失う義実の親子として構想されているのである。」（高木　元『廿日余四拾両・盡用而二分狂言―註釈及び解題―』（『'89江戸文学年誌』・江戸文学年誌の会編、ぺりかん社平成元年五月）

(17) 播本眞一「『南総里見八犬伝』と『孟子』」（『江戸文学と漢文学』和漢比較文学叢書17）では、八犬士を中心とする善主人公の「過ち」の背後に『孟子』の理念が存在する事を指摘する。また、拙稿「親兵衛の左手」『讀本研究　七輯』（広

島文教女子大学研究出版部『讀本研究』編集部・平成五年九月）では犬江親兵衛の慢心と反省が、親兵衛の形象にかかわる事を考えた。

(18) 実際の徳川家がどうであったかは別として、『三河国後風土記』を通じて一般化したこの事実は、『徳川実記』にも記されて、幕府の公式見解となった。

(19) 『絵本尊氏勲功記』があるが、この作品は馬琴の得意とする作品ではなかったようだ。『作品部類』参照。

(20) 拙稿『馬琴と郷士』（昭和53年11月『国語と国文学』）。

(21) 拙稿『曲亭馬琴の俠』（昭和52年4月『藝文研究』慶応義塾大学藝文学会紀要）「『俠客伝』執筆を境にして、『八犬伝』の「俠」の例は三対五の比率で増加する。量的のみならず質的変化も起こっており、その中に個別的なものから普遍的なものへの発展が含まれている。即ち一殺他生的忠義観的なものから一殺多生的政治意識への変化である。」と述べた。

(22) 拙稿「馬琴の現在的魅力」（昭和54年12月『国文学　解釈と鑑賞』44巻13号　特集現代文学総論　第二特集近代のブラック・ホール馬琴の影・至文堂）。

(23) しかし、こうした設定は普遍性を持つ。

(24) こうした見解に対して、小谷野敦氏は『江戸文学11』「『八犬伝』の海防思想」で第三節に「安房＝日本の「置き換え」」を立て、氏の前説をさらに展開させておられるが、この説はとらない。

(25) 拙稿「馬琴は幕府終焉の予言者たりえたか」（昭和57年8月『国文学―解釈と教材の研究』　学燈社）。

(26) 角川文庫本、岡見正雄校注『太平記　二』の補注十二・九。『MUSEUM 1971. 2』（東京国立博物館）「八字文殊像について」高崎富士彦、参照。